

Presidencyの難しさ



軽部 謙介
時事通信社 解説委員

米ニューヨークのメトロポリタン美術館は世界でも有数の規模を誇る。初めて訪れる人は、巨大なたたずまいと、豊富な所蔵品に驚く。

アメリカ絵画を集めたコーナーの一角に、壁一面を占拠した大きな絵が展示されている。題名は「デラウエア川渡河」(Washington Crossing the Delaware)。日本であまりなじみのないこの絵は、エマニュエル・ロイツェという、これまた日本ではほとんど知られていない画家により19世紀半ばに描かれた。しかし、米国ではこの絵柄を見たことのない人は稀だというくらいきわめて有名な作品だ。

時は独立戦争。英国軍に押されがちな独立軍は、ジョージ・ワシントン将軍率いる部隊が敵の裏をかき、真冬のデラウエア川を夜間渡河するという危険な作戦に出る。結果的にこの奇襲攻撃は成功し戦局の打開に貢献するのだが、「のるかそるか」のこの戦いを絵画化したのがロイツェだった。

絵柄はシンプル。真ん中に一艘の小舟。川には氷が浮かび、舟をこぐ男たちの顔からは悲壮な覚悟と緊張感が伝わってくる。そして、船の先頭にすっと立つのが、ワシントン将軍だ。マントをひるがえしながら、口を固く結び真っすぐ前を見つめている。

いつの時代も「歴代大統領で誰が好きですか」という質問をすると、圧倒的な支持を得る人物。独立軍の司令官として、そして米国の初代大統領として、難しい時代を統治したワシントンは、その無言のたたずまいでリーダーの資質とは何かを問いかけているようだ。

実はこの有名な絵の模写がホワイトハウスにもある。

海兵隊員が警備するウエストウィングの玄関。この建物は大統領や幹部の執務室、閣議室などが集まる米国政治の心臓部だが、ここから入ると、中は薄暗い待合所になっている。この絵がかかっているのはまさにそこだ。これから大統領に会おうという人たちは——国賓待遇で訪れて正面玄関を使えば別だが——必ずここを通る。絵の大きさは実物の数十分の1程度の小さなもので、この絵に気づかぬまま通り過ぎる大統領の客人も少なくないのだが。

なぜここに「デラウエア川渡河」の絵をかけたのだろうか。「これからお前が会うのは、威厳あるこのワシントン将軍の後継にあたる人物なのだから、心して待て」とでも言いたいのだろうか。

この絵がここにかけられた経緯を、ホワイトハウスの広報部門の責任者に尋ねたことがある。彼女がいろいろと「オタク的」なことを知っていたからだ。

「閣議室前の『ルーズベルトルーム』の『ルーズベルト』というのは、セオドアでもFDRでもない」

FDRというのはフランクリン・デラノ・ルーズベルト大統領のこと。真珠湾攻撃を受けて日本との戦争を始めた第32代大統領だ。セオドアはそのもっと前、1901年に就任した第26代のセオドア・ルーズベルト大統領を指す。

現在のドナルド・トランプ大統領も執務するオーバルオフィスに並ぶ閣議室の前は、ルーズベルトルームという部屋になっている。窓のない小さな会議室。閣僚を指名するときなど大統領はよくここで記者会見する。

得意げに、この部屋の名前の由来はセオドアでも、フランクリンでもないんだとうんちくを傾けていた彼女なので、待合室にかかる「デラウエア川渡河」が何でそこにあるのか知っているのかと思ったが、最初の反応は「え、そんな絵あったっけ?」。

まあ、有名な絵の模写の一つや二つ、ホワイトハウス内にかかっているもおかしくないということで了解した。

実はこの建物の中には、さまざまな絵画や彫刻が「展示」されている。廊下には米国の古い風景画が多数配置され、ルーズベルトルームには馬に乗ったセオドア・ルーズベルトの肖像画がかけられている。これは時にフランクリン・ルーズベルトの絵に代わることもあるのだそうだ。執務室のオーバルオフィスには南北戦争で国の分裂を回避したエイブラハム・リンカーン大統領の胸像も置かれている。

いずれも国民に人気の高い大統領だ。そして彼らはそのプレジデンシー (presidency) を高く評価された政治家たちだ。

この単語の日本語訳は簡単ではない。辞書には「大統領の職」という、わかったような、わからないような日本語が掲載されていることが多い。しかし、実際にこの単語が使われるときは「大統領の職」という意味よりも、「統治の仕方」とか「政治的な立ち居振る舞い」といったニュアンスを含んだ幅広い概念を示す単語として使われるケースが多いようだ。残した業績がイメージの前面にでることもあるし、そうでないこともある。

たとえば「Nixon presidency」といえば、「権謀術数に長けた大統領」というイメージが先行しあまりポジティブな感じには聞こえない。米中国交回復、金・ドル兌換停止という20世紀後半の国際政治経済に大きな影響を与えた大統領にもかかわらずだ。

逆に「Obama presidency」とくれば、初のアフリカ系米国人大統領を支持する人々にとって、貧しい人にも医療保険を導入した功績を連想させる心地の良い語感なのだろう。

「デラウェア川渡河」の絵にみられるようにジョージ・ワシントンのpresidencyには厳然とした雰囲気を感じられる。危険な夜間渡河作戦を決行する決断力と判断力。そしてリーダーとしての指導力。

「櫓を操る人物はネイティブ・アメリカン（インディアン）だ」とか「このこぎ手は女性に見える」など、ロイツェの絵画をめぐるのは、今でも議論がかまびすしいが、ワシントンの立ち姿は彼のpresidencyを象徴しているようにみえる。

そして、それ以降ホワイトハウスの主となった44人もさまざまなpresidencyを発揮することになる。

ワシントン支局に在籍していたころ、その証しを探りに車で北西に向かった。

Let's rollの合い言葉

ペンシルベニア州シャンクスビルは、アパラチア山脈の丘陵に抱かれた何の変哲もない静かな街だった。

しかし、2001年9月11日午前10時03分。この街のはずれに突然飛行機が「降ってきた」ことで、この地は米国史に名前を残すことになった。このとき、ものすごい音とともに、地面が揺れた。もちろん、シャンクスビルの住民が飛行機の中でテロリストと乗客たちの壮絶な戦いが繰り広げられていたことを知るのはいくらか時間がたってからになるのだが。

ユナイテッド93便。のちに映画のタイトルにもなった便名の飛行機は同時多発テロ事件で、テロリストたちによってハイジャックされた。最終的にこの旅客機はワシントンのホワイトハウスか連邦議事堂に突っ込

む予定だったといわれている。

乗客たちは、地上との電話連絡などで、ほかの飛行機がワールド・トレードセンターやペンタゴン（国防総省）に突入したことを知る。そして彼らは覚悟を決め、操縦席を乗っ取った犯人たちを排除して彼らの目的完遂を防ぐべく行動を起こす。

“Let's roll”

そのとき、乗客の1人が発したのがこの言葉だ。

「おい、行こうぜ」「ちょっと片づけてこようか」というような語感だろうか。あまり重い表現ではなく、米国人がごく気軽に使う言葉だ。

ボイスレコーダーなどの解析から、最終的に乗客たちは操縦席への突入に成功したとみられているが、機体がシャンクスビルの丘陵に激突したのはその直後だった。

現在、ここには93便に乗っていた「英雄」たちをたたえる記念碑が建立されている。同機に乗り合わせた早稲田大学の久下季哉さん（くげ・としや、当時20歳）の名前も刻まれている。

同時テロ事件から10年経った2011年9月の記念日、このシャンクスビルの地に立ち演説を行ったのが、事件当時米国の「最高司令官」だったジョージ・ブッシュ（ジュニア）大統領だ。父親のジョージ・H・ブッシュ大統領と区別するため、米国では「Wブッシュ」と呼ばれているが、この時はすでにホワイトハウスを離れ肩書は「前大統領」になっている。

Wブッシュ氏は演説の中でこう述べた。

「犯人たちがほかのターゲットに飛行機で突っ込んでいることを知ったとき、93便の乗客たちは大きな責任を果たすことを受け入れました。そして米国の民主主義が攻撃にさらされている瞬間、最後の行動に出ます」

そしてLet's rollの物語を使って聴衆の感動を誘った。

実はWブッシュ氏は在任中からこの手の演説を重ねている。事件後の2001年11月に行った30分間の演説は、ユナイテッド93便の紹介を使いながら、こう話しを締めくくっている。

「Let's rollという言葉で知られるようになった若者は、この日の朝、自分が将来英雄として扱われるなどとは知らず、その飛行機に乗りました。私たちはこの勇敢な男の言葉を思い出します。この偉大な国のスピリットとして」

「私たちの勝利は約束されています。私たちは間違いなく新しい挑戦に直面しています。進軍命令は下りました。親愛なる米国民の皆さん。Let's rollです」

Wブッシュ大統領は、この事件をきっかけにアフガニスタンの宗教国家とイラクのサダム・フセイン政権

打倒に乗り出す。そして結果的にアフガンのタリバン政権を倒し、イラクに攻め込み全土を「解放」した。

これだけであれば、Bush presidencyのストーリーは「同時テロ事件に報復を果たした大統領」「イラクを解放した指導者」という内容になったのだろう。

しかし、イラクへの進軍が「大量破壊兵器を保有する」という偽の情報に踊らされたものであったことは、その評価を曇らせた。

さらに、これらの戦争の結果、4000人を超える若者が命を落とし、その数の何倍もの心身を削られた従軍兵士たちが、ディビッド・フィンケルの労作、『帰還兵はなぜ自殺するのか』(原題Thank You For Your Service)の世界を生きていかねばならなくなった。

PTSD、貧困、ドラッグ、離婚、そして自死。彼らにとっての壮絶な日々はまだ続いている。

そのようなことを気にしているのかどうか不明だが、Wブッシュ氏は事件から10年経っても「Let's roll」を多用している。逆にいえばWブッシュ時代のpresidencyには「Let's roll」という言葉が不可欠なのだろう。

イラク戦争の失敗を上書きできるだけのインパクトがあるし、そして自らを——93便の乗客と同じように——戦争を「仕掛けられた」大統領、「テロとの戦い」に立ち向い勝利した大統領として描くことができるからだ。そしてうまくいけばそれが彼のpresidencyになる。

緊迫した機内でハイジャック犯に立ち向かうべく「Let's roll」と声をかけた男性は、まさか自分の発したごく日常的な一言が、時の大統領の為政を色づける道具に使われることになるなどは想像しなかっただろう。その時の彼やほかの乗客たちの頭には、テロリストたちの立てこもるコックピットのドアをどうやって打ち破るかしかなかったはずだ。彼らの突撃はWブッシュ大統領が命令したものでもなく、乗客たちの自発的な行動だった。

結局政治は「Let's roll」を実にうまく利用したことになる。

トランプ流imperial presidency

以前このコーナーで「皇帝大統領制」を紹介したことがある。imperial presidencyの訳語だ。

あの時も説明したが、この単語を最初に使ったのは、ケネディ大統領の側近として活躍したアーサー・シュレジンガー氏。権謀術数を好むニクソン大統領の横暴なやり方を帝政とたとえて用いたのだが、今のトランプ政権は、別の意味で皇帝大統領制を志向しているよ

うにみえる。

立法府を口汚くののしり、司法府にちょっかいを出し、果ては米連邦準備制度理事会(FRB)の金融政策にまで口をはさむやり方は常軌を逸している。

特にFRBは三権の外にあり、実体経済の動向のみをみて中立的に金融政策を判断していく。政治家が中央銀行にちょっかいを出したがるのは洋の東西を問わないが、ここまで露骨な形で介入を口にする指導者は見たことがない。

ジェローム・パウエル議長は、中央銀行の政治的な中立性にはことのほか注意を払い、トランプから無能呼ばわりされても、じっと耐えている。

「FRBはまた失敗した」「根性も先見性もない」「利下げしろ」

こんな罵詈雑言を浴びながらもじっと耐えたパウエル議長は「適切に対応する」と気にしない風を装うが、大統領が追い詰めれば追い詰めるほど、行動しにくくなっているのは間違いない。米国の景気動向にもよるが、選挙の年である2020年にはさらに慎重な決断が求められるため、トランプ大統領が何を叫ぼうが金融政策の発動は難しいのではないかとみられている。

伝統的な米国の統治作法をひっくり返した特異な大統領のpresidencyとはどんなものになるのだろうか。

アトランティック誌は2017年10月号で「トランプは過去の大統領とは違い、presidencyそのものを試している」と表現した。

おそらく本人にそのような意識はないだろうし、この人物にまともなりテラシーの力やコミュニケーション能力が欠けているというのは衆目の一致するところ。しかし、彼が偉大な大統領を目指しているということも、これまた多くの観察者が同意する。

そしてトランプ大統領は、その偉大なリーダーであることを指先で示そうとしている。ツイッターを使っただ。

ニューヨーク・タイムズ紙は最近「トランプは1万1000を超えるツイートで、大統領制(presidency)をどう再編成したのか」という長文の記事を載せた。この中で同紙の取材班は、トランプがこれまでに発したツイッターの利用傾向を分析。10月の第二週は一週間で271回のツイートがあったことを明らかにしている。単純計算で一日40回近くにのぼる。このやり方は、側近たちとの協議や意思決定の仕組みにも変化をもたらさざるを得ないだろう。

また、これまでのツイッターを内容別に分けると、「誰か、もしくは何かを攻撃しているもの」が5889回、逆に「誰か、もしくは何かを称賛しているもの」

は4876回だった。つまり、民主党やメディアなど自身が敵視する対象に対しては言葉汚くののしり、自分の味方や自分自身に対しては称賛の言葉を惜しまない。

これが就任以来トランプ大統領のpresidencyの実像だろう。

ツイッターという先端の手法と、presidencyという重い単語の組み合わせにこの見出しの面白さがあるのだが、自分の思い通りにいかないことに対する怒りの爆発は、まさに独裁的な「皇帝」を思わせる。

当然のことなのだが、「皇帝大統領制」というシステムは厳格な三権分立の適用を是とする米国の伝統的な政治風土になじまない。トランプ大統領は公約としてメキシコ国境との間に壁をつくるよう予算を求めたが、議会は徹底して反対し「壁のようなもの」ができた程度だった。

この相互抑制機能は、大統領が民主党であれ共和党であれ発揮されるし、これからもそう予想されている。たとえば民主党予備選挙で健闘しているエリザベス・ウォーレン上院議員。この候補が主張する「富裕税」が実現した場合、米国の金持ちたちは大変だろうと想像するが、ワシントンの民主党関係者はこう話す。「同時に行われる連邦議会の下院と上院の選挙結果にもよるが、基本的にこの劇薬のような税制に議員たちが賛成するとも思えない。彼女が大統領になって仮にこの税制が提案されても、議会在否決するとみているので、金持ちたちは安心している」

今でも多くの米国人は「厳格な三権分立は機能する」と信じているし、米国民主義の核心はこのチェック・アンド・バランスだと確信している。もともと大統領の権限は小さく、フランスの外交官、アレクシス・トクビルは有名な『アメリカの民主政治』の中で、大統領のことを「劣位にある従属的な権力として立法議会のそばにおかれている」(井伊玄太郎訳)と表現している。

「Let's roll」のWブッシュ大統領も、皇帝大統領制を懸念された為政者だった。2005年にはボウドウィン大学のアンドルー・ルダルビジ教授が『The New Imperial Presidency (新皇帝大統領制)』という本で「皇帝大統領制は戻ってきたのか」と問題提起したことも以前紹介したが、当時「大統領に権限が集まるのは当然のことだ」という学説も台頭していた。

確かに2001年の同時多発テロ事件から、アフガン戦争を経てイラク戦争へと米国を導いたWブッシュ時代には、「国家の非常時に大統領権限は強い方がいい」という考え方が広まっていた。

しかし、何事にも先見性がなく、行き当たりばったりで、情緒優先のトランプ大統領に「権限が集まる」

のはかなり危険なことだろう。

Wブッシュ時代とトランプ大統領の大きな違いは、米国で三権分立の限界を議論することの当否を意識していたかどうかという点だ。少なくともWブッシュ政権は大統領権限を増大させることに法律的な根拠を与えようとした。しかし、今のトランプ大統領にとって、厳格な三権分立は自らのやりたいことを妨げる邪魔な障害物でしかなく、合法性の追求を行っているようには見えない。

トルーマンの器と覚悟

ハリー・トルーマン大統領は、在職死亡したルーズベルトの後を襲い第33代大統領となったが、執務机の上にこんな風にかかれたプレートを置いていたようだ。

“The buck stops here”

「責任はおれがとる」とでも訳すべきか。なんとも格好のいいセリフだ。

しかし、彼はこの机の前で広島、長崎への原爆投下を決断した。甚大な被害が出ることはわかっていたのである。米国内では「戦争終結を早めるためという理由で決断した」と説明したのだろうが、非人道的兵器であることは十分承知していたはずだ。

個人的に核使用の決断は絶対に正当化できないと考えているが、トルーマンはその賛否の声を全部引き受けて墓場にもっていく覚悟だったのだろう。だから「責任はおれがとる」なのだ。

これもpresidencyの一つ。何かの重大な決断を迫られるとき、後世の歴史に判断をゆだねる覚悟をもった政治家として、トルーマンの名前は残った。

要するにpresidencyというのは自らの決断に責任をとる覚悟をもった指導者とか、品格や威厳のあるリーダーを対象にして語るときに輝きを増す単語なのだ。

では今のトランプ大統領はどうか。彼のpresidencyは輝きをもって語られるのか。

「残念ながら、そういう日が来ることはない」

極端な決めつけといわれるかもしれないが、個人的にはそう思っている。

寡黙な表情でデラウエア川を渡るワシントン将軍と、スピッツのように毎日吠え将来“twitter presidency”と呼ばれるかもしれないトランプ大統領。リーダーとしての力量の差はあまりに明白ではないだろうか。

